# 付録B

## 階層的志向のモデルを根拠づける信条のまとめ

**図：** 中央に「服従、権威、かしら（頭）」と書かれた円があります。その周りに九つの主張が並び、それぞれから一本の矢印が円に向かって**内向きに**伸びています（上から時計回りに）：

- 創造の秩序の階層
- 創世記3:16は規定／命令として理解される
- 名づけによる権威
- diakonos は男性だけに限られる
- エバはだまされた、だから女性は教えてはならない
- かしらであることは権威を持つことを意味する
- テモテ第一2:11-12 — 静かさ
- ガラテヤ3:28は霊的な平等だけを意味する
- 女性は権威を持ってはならない

キリストが父に従うように、女は男に従う。一般に伝統主義者たちは、女性は男性と比べて劣っているわけではないが、霊的には同等の価値を持ちながらも異なる務めを持っている、と言います。つまり、その務めは性別によって決まるということです。その聖書的根拠は、「かしら（頭）」が権威と同じ意味であるということだとされます。そしてキリストが教会のかしら（権威）であり、男が女のかしら（権威）であるのだから、女は従わなければならず、男に対して権威を持ってはならない、とされます。それゆえ女は男に教えてはならず、説教してもならない、というのです。

この伝統主義的な見方では、次のような意味が前提とされています。

| 用語 | 意味 |
|---|---|
| ʿezer kᵉnägdo | 対等な助け手は「従属的」を意味する |
| kephale | かしら（頭）は「権威」を意味する |
| authentein | 「権威」と訳される |
| sigao | 「話してはならない」を意味する |
| hupotasso | 「妻の夫への服従」を意味し、教会によって「女性の男性への服従」という意味で受け継がれている |

中心的な聖書箇所として挙げられるのは：

- エペソ5:22（服従）
- テモテ第一2:12（私は許しません）

- エペソ5:23とコリント第一11:3（かしら）

（ガラテヤ3:28はもっぱら霊的に解釈される――義認の教えの重要な言明としてではあるが、実際の生活への具体的な影響はないものとして）

## 賜物志向のモデルを根拠づける信条のまとめ

**図：** 中央に「ガラテヤ3:28」と書かれた円があります。そこから十一本の矢印が、次の主張に向かって**外向きに**伸びています（上から時計回りに）：

- ヨエル3:1-2 — 男性と女性が共に預言する
- コリント第一12:1-31 — 賜物は性別に縛られない
- コリント第一15:22 — アダムが罪を犯した
- ローマ16:1 — フィベは diakonos である
- テモテ第一2:11 — 女性は学ぶべきである。文脈では偽りの教えが問題になっている
- コリント第一14章 — sigao は礼拝に秩序をもたらすためのものである
- ペテロ第一3:1-7 — 互いに従うこと、互いに仕えること、互いに愛すること、それに加えて女性たちが自分の宗教を変える自由
- コリント第一11章 — かしらは相互依存を示している。文化的・性的な違いはぼかされるべきではない。文脈は権威ではなく源（起源）を示している
- エペソ5:21 — 互いに従うこと
- ピリピ4:2-3 — スントケとユウオデヤは同労者である
- コリント第一7:4 — 互いに相手のものであること、互いの権威

男性と女性は等しく神のかたちに造られています。それは、彼らが交わりの中で生き、この交わりに仕えるためです。しかもそれは、性別に基づいてではなく、聖霊によって分け与えられた賜物に基づいてなされます。この交わりの本質は、互いに従うことと、互いに責任を負うことにあります。すべての人が仕える者であり、その賜物によって互いの徳を高めることに貢献すべきなのです。

救いについてのこの新しい見方では、次のような意味が前提とされています。

| 用語 | 意味 |
|---|---|
| ʿezer kᵉnägdo | 対等な助け手は「顔と顔を合わせて、互いにふさわしい」を意味する |
| kephale | かしら（頭）は「源」を意味する |
| authentein | めったに使われない語で、支配を示唆するものと受け止められている |
| sigao | 注意深く聞くことができるように、自発的に静かにしていることを意味する |
| hypotasso | 自発的に自分を位置づけること／秩序の中に身を置くことを意味し、互いに従うことという文脈で用いられている |

中心的な聖書箇所としてガラテヤ3:28が挙げられます。この箇所は、キリストにあるすべての人の平等を示しており、霊的にも実際的にも理解されるべきものです。キリストにある私たちの新しいアイデンティティを日々生きることは、キリストにある私たちのいのちの永遠の現実から切り離すことができないからです。